

残照

迎いのタクシーの運転手がトランクを閉め、ハンドルを握った。嫁の圭子が後座席の窓から会釈し、その奥の恒夫が紀和に軽く手を上げた。車は大きくUターンして西方に延びた川内市への道を見る見る遠ざかってゆく。

膝の痛む紀和は、玄関前の石段をゆっくり下りると、門柱に手をやってしばらく佇んで見送った。車は、浅く色づいて続く稲田の先に、茜色に染まった空を黒々と遮る丘陵の陰に消えた。鹿児島の日暮れはゆっくり訪れる。

平成十六年、新幹線が部分的とは言え開通して、一人息子恒夫の研究室のある福岡も近くなった。紀和は、夕焼け空を眺めながら息子夫妻を見送るのは初めてだと気付いた。今までは午後のお茶もそこそこに帰らねばならなかった。「私の人生も一日に例えれば、きっとこの時刻に当たるんだわ。まだ闇夜までには間があって、静かな美しい時間が少しは残っている。今までの鬱屈した気分や過去はさっぱり忘れて、これからは自分のために、残された時間を大切に生きて行くことにしよう」

紀和は、一昨日夫賢三の三回忌を済ませたばかりである。片付けも終わった昨夜は、恒夫が友人と飲みに出掛け、嫁と二人だけになった。夫の生前にはなかった嫁姑の一夜が紀和の口を軽くした。そして長らく胸の奥につかえていた夫に対する恨みつらみを、せめて嫁には理解させたいとは以前から思った。紀和は自分が「美人だけとお高く冷たい人」と評されて来たことを知っていた。

「私を冷たくしたのは、夫賢三なのよ」

と内心は叫びたいのを50余年間抑えていた。

夫の所業を初めて口にしてみると、口惜しさが堰を切ったように流れ出た。言いすぎたかとも思うほど思い切り吐き出すと、かえって後ろめたささえ覚えた。そして今はすっかり胸のつかえが取れた気分である。他人には七十三歳は、黄昏よりも遅い頃に違いない。しかし紀和は、まるで人生のスタートに立ったような気分であった。頬にそよ吹く夕風を心地よく感じて、背筋を

伸ばし目を細めた。

紀和のこの地との縁は、戦後、朝鮮から引き揚げてきたところからはじまる。

日本国が敗戦した時は紀和が、京城第一高等女学校三年生、十五歳の夏だった。父の秋山武男は京城高等商業学校で英語の教師をしていた。母は三年前に結核で亡くなっていた。

紀和は手に持てる限りの物が全財産といった状態で、内地に引き上げるこ
とになった。日本人達は声を掛け合い、連れ立って汽車で釜山に向かった。

釜山は群衆でごったがえしていた。トコロテンを突き出すように、船が着
く度に押し出され、次々に船に乗った。

上陸した山口県仙崎から、停車した列車に次々と乗り込んだ。長門で下り
列車に乗り換え、武男の郷里である鹿児島川の川内川下流の農村に向かった。

乗り換えた下関からは、家畜並みの列車で、コトコトと一晩中南下し続け
た。夜のこととて影から推し量るだけだったが、大きな都市は全て焼け野が
原と言ってよかった。街灯も僅かだったし、まばらな民家の黒い影が車窓を
横切った。

夜明けに降り立った川内駅からの眺めも同様で、焼け跡に点在するバラッ
クには人影もなかった。父は故郷の変貌に声も出ないようだった。初冬の風
の冷たい朝であった。

武男の母タミは健在で、たどりついた二人をだき抱えるように迎えた。嫁
のマキ子が用意した囲炉裏の鍋のすいとんを食べた。久しぶりに温かいもの
を口にすることが出来て、二人は人心地付いた気分になった。そしてうすべ
りの敷かれた仏間で、こんこんと暗くなるまで眠った。

徴用から戻って三ヵ月、農業に専心していた兄の真一が、鶏を締めて、刺
身を作った。マキ子は鶏の残りの部分の殆どを野菜と煮込んでさつま汁を準
備した。精一杯の御馳走であった。聞きつけた近親の人たちも集まり、広い
ナカエと呼ばれる囲炉裏のある居間はひとしきり賑やかになった。

真一は鷹揚に弟と姪の無事を喜んだ。マキ子は頭の痛いことになったと内心想った。二十歳と十八歳の息子の母親としては、すらりとして垢抜けた紀和が気になった。

何より食料事情がよくない時代だったから、やりくりを考えねばならない。当時は米の収穫量に対して過酷な供出量が割り当てられていたから、農家といえども、芋や豆を炊き込んだり、ダブダブの粥にしたりと量を増やして何とかしのいでいる状態だったのだ。

敗戦の昭和二十年は、働き手の男の多くは出征していて、労働力不足の上、天候が不順で不作だった。そこへどっと引揚者たちの到来である。疎開者の中には、野草や芋の蔓ばかりか蚕のさなぎやセミ、ゲンゴロウまで食べたと言う人もいて、何でも食べられる物なら食卓に上った時代だった。

しかしその頃の人たちは、貧しい中を親戚、近所がよく助け合っていた。家族主義のよい面や隣組の互助の精神があって、何も見栄をはることもなく、乏しくともお互いある物を分かち合うのが当然と思って生きていた、素朴な心やさしい人情の時代だった。

まだ終戦から日も浅く、男性の多くが出征したままで、引揚者のはしりだったこともあり、武男は川内市内の中学校の教師の口を得ることが出来た。

紀和も焼け跡の中に残った県立高等女学校に入学が認められ、父と同じ汽車で通うことになった。

紀和は、祖母タミが急遽自分の木綿の縞の着物を仕立て直して作ってくれた、作務衣のようなモンペ姿に祖母の足袋、下駄履で通学した。どこからか探してもらった古いズックの掛けカバンを掛けて、駅までの三キロ以上の田舎道を、近所の同級生松井みち子と40分ほどかけて歩いた。京城の通学路は坂道だったものの、街の中のこと10分とは掛からなかったのだが。

通学の汽車も時には貨物用の無蓋車で、トンネルに入ると煙の煤で鼻の穴が黒くなった。そんなに長いトンネルはなかったことは幸이었다。

焼け跡の街を学校まで歩きながら、紀和は実際の空襲には遭遇していなかったのも、火災も死体も見ることなく、血腥い死臭も、死体の焦げる臭いも嗅ぐことなく済んだことを心から感謝していた。みち子から、終戦の二日前に、通学列車に向かって空から機銃掃射が浴びせられ、谷に転がりながら木影に隠れた恐怖などを、その場所にさしかかるとよく聞かされた。もう終戦になることを知っている筈の米軍のそんな行為は、一体何だったのだろうと話し合った。戦線からはるか後方だった京城の女学校でも、看護婦の研修のために病院に派遣されたことがあった。その病院で見た、鮮血したたる手術の光景に、紀和は怯えたものだったが、それは自分の生命にとっては何の恐怖でもないことであった。

まだ空襲から半年と経っていなかったから、学校では授業よりも作業の時間が多かった。校庭は教師たちの野菜畑になっていたし、教室は焼け残りの寄宿舎だった。寿司詰めで、板の間に座って画板が机代わりといった授業だった。しかしそんな中でも、教師たちは情熱を込めて授業をしていたし、生徒たちも、クラスから四五人しか合格者の出ない受験の難関を通過したエリート意識を強く持っていて、真剣に聞いていた。

やがて寒い一時期が過ぎると、紀和は田舎道の通学が楽しみになってきた。駅までの道沿いに川内川の支流が流れ、葦の間からせせらぎが聞こえる。群れ咲く雑草の小花も可愛い。道の片側には杉の丘陵が続き、反対の川の先には田が広がっていた。

途中三回ほど、男子中学生の二三人が追い越してゆく。それは殆ど毎朝、決まった時刻に殆ど同じ場所で通り過ぎるのだった。彼らは決して振り替えることもなく行くのだが、紀和はいつしかその足音を意識していた。乾いた道に高下駄の音が後ろから聞こえるだけで、紀和の胸は鼓動始めるのだった。この頃の紀和は、自分が男性から見られているという思いだけで上気し、ドキドキするのだった。対面からすれ違う時などは、相手が男性であれば、年齢に関係なく顔もあげられない程赤くなってやり過ごした。自分は自意識過

剰なのだと思っ一方、みち子はどうなのだろうとそっと伺うが、何故か彼女はあっけらかんとした表情のままであった。紀和はきっとみち子と彼らは幼友達だからなのだろうと思った。

半月もすると、紀和は背の高い肩幅のある一人の学生に目が行くようになった。駅で車を待つ間などにそれとなく見やった。彼は丸めたノートで友人の肩をつついたりして、よく大声で笑った。紀和はふと彼も自分を意識しているのだろうかと思った。

三月になって彼を見かけなくなった。なに気なげに、みち子に聞くと、藤山歯科医院の長男として、東京の医科大学に進学したのだとの答えだった。紀和は初めて隣の集落の洋風な造りの藤山歯科医院が彼の家であったことを知った。

武男は周囲の勧めもあって再婚することになった。相手は小学校教員だった夫を南方の戦線で亡くした、川田澄子と言う働き者という話だった。

髪をひつつめに結って、羽織と対の紵の濃紺の着物を着た澄子が、正月過ぎのある日、その兄亨に連れられて挨拶に来た。紀和は、やや丸顔で、明るく屈託なさそうな彼女に好意を持った。

格別に式など挙げることもなく、春休みに武男は駅から離れた村堺に近い澄子の家に紀和と移った。澄子には小学四年生の正一がいたが、正一も素直に武男と紀和を受け入れた。正一は家族が出来たことを喜んでいるようだったし、紀和も弟が出来たことが嬉しく、姉らしく振る舞って、宿題を手伝ったりした。それぞれが、こじんまりとした新しい家庭の雰囲気し心を和ませていた。

夏休みのある日だった。マキ子が自転車で紀和を迎えに来た。タミがすぐ来るようにと言っているという。義母の澄子に断って自転車を借り、麦わら帽子を被ると、紀和はマキ子の後に従った。手製の紺格子のフレヤースカートの風になびいた。胸にギャザーの入った襟ぐりの大きい白いブラウスも手製だったが紀和によく似合った。

垣根を通り中庭を通過して、ナカエから上に上がった。従兄たちが無言で何か意味ありげに目配せしたが、紀和には意味が分からなかった。マキ子に言われて、オモテと呼ばれる座敷の棟に行った。床の間を背にしてやや小肥りな丸顔の三十歳ほどの男が窮屈そうに正座していた。右手には父と同じ中学校の五十歳ほどの数学の教師が座り、その隣にはいつの間に来ていたのか父武男が澄ました顔で座っていた。タミと真一が左手の見知らぬ老人と話をしている、その脇に開襟シャツを着た日焼けした中年の男が控えていた。

紀和は緊張してお辞儀をすると、促されて主客からお茶を入れ換え注いだ。

「突然じゃがな。紀和さんと言われるか、こちらはわしの孫でな。賢三というが、おととい盆で東京から戻ってな。こちらにいい娘さんがいると聞いて早速に伺ったという訳じゃ。これは縁というものじゃて、まあ会うてみるのが一番と突然伺った次第じゃ」

老人は主客を紹介して左手の男を振り返った。

「こっちは長男で跡取りの寛治でな、小学校の教師じゃが、わしの農業も手伝ってくれている」

老人は目的を率直に語った。武男の隣に座っている髪が薄い教師が仲人役らしく、彼の家は、隣町の自分の家の近くにあって代々続いている名家なのだということ、彼の父は戦中に病没したこと、彼は三男で東京の役所勤めの医者だということを、紀和に説明した。その兄も公務員で東京勤務ということであった。

紀和は小此木賢三というその男を上目使いにチラリと見るのが精一杯であった。糊のきいたワイシャツに紺のネクタイを締め、丸い黒縁の眼鏡を掛けていたが、その奥の眼差しは優しそうに見えた。

澄子は暮れには出産の予定だったし、正一の中学進学もあって、物入りが続きそうであった。しかし小此木家の申し出によると、当方は紀和を大変気に入っている。戦後の物資のない時代のことだから、嫁入り道具などは省略して、こちらで簡略な式で済ませ、東京に送り出したい意向だがどうだろうかという。紀和はどう答えてよいか戸惑って、全て父母の判断に任せた。武

男には異存がなかったし、澄子は面倒な親戚付き合いや支度に苦労しないでよいと聞いて気が楽になり、乗り気になった。

そしてその縁談はトントンと進み、翌年の紀和の卒業を待って、氏神様で簡略に式を済ませ、一旦賢三は東京に戻り、後から紀和が上京するということになった。東京から急行でも鹿児島迄は二十七時間、片道二日を要した時代のこと、無理して一週間の休みを取って帰郷しても、まるまる使える日は三日しかなかった。

その翌年の昭和二十二年度は、学校制度が大きく変わり、新制中学・高校が誕生することになっていた。今までの中学校、女学校は高等学校になって合併し、男女共学が基本となった。したがって旧制中学には、高校入学の年になるまで入学して来ることはなかった。当時の一年生は高校の併設中学二年ということになり、四年間最下級生のままだった。

紀和の女学校も、四年制だったから、あと一年設けられた専攻科に進まなければ、来春に女学校を卒業の予定である。新制高校に進むとなれば、あと二年間を高校生として通学出来るのだ。紀和は、共学も体験してみたいとも思ったが、父に負担もかかることだし、東京での新婚生活も悪くはないと思った。当時あと二年の学費の負担に耐えられない家庭も多く、半分ほどの生徒は卒業の道を選ぶことになった。

その年の秋は、澄子の持っていた二枚の田は豊作だった。武男も紀和も総出で稲刈りを済ませた。供出しても一年は何とか食べていける量があった。

師走も半ば過ぎたある朝、澄子が産気づいた。一週間ほど前から澄子の母のクニが来ていた。隣町に住むクニは、夫を亡くしたものの未だ六十歳前で、澄子の兄の亨と嫁、孫を助け、骨惜しみせずによく働く典型的な農家の母であった。

澄子の家は隣家とは百メートルほど離れていたし、そこの夫婦も日中は田畑に出て留守ということは日常である。何かがあっても公衆電話まではもっと離れている。そんな折は、クニはとても心強い存在だった。

幸いなことに、産気づいた時は武男も紀和もまだ家を出る前だった。武男

が自転車で町にいる産婆を呼びに走った。クニの頼みで、かまどの大釜で湯を沸かしながら、紀和はこのめでたい日を体験出来ることを喜んでいて。正一は、生まれるまで家に居たかったので、未練顔でしぶしぶ登校した。

出産の現場は、産婆とクニが立ち会った。元気な産声が聞こえ、武男と紀和も部屋に入った。産湯に洗われた赤ちゃんは、もう一個の生命体で、しかも面をして目を閉じ、わめきながら産婆の手の中で手足をバタバタと動かしている。

隅に丸められた澄子の汚物を片付けながら、紀和はその血腥い臭いにむかつき、思わず戦場の血の臭いを想像した。

赤ちゃんは女の子で、明代と名付けられた。武男が「これからは明るい代になるのだ。戦争を起こさないね」と言った。

「私の名前は何なの」

紀和が聞いた。

「和は聖徳太子が尊しとされた「なごむ」、まるくまとまる意味さ。父さんは、アジアがまとまる世紀を願ったんだ。日本がその中心になってね。和紀より紀和の方がいいだろう」

紀和は敗戦まで父が民族の隔てなく学生と付き合ってきたことを誇りに思い、自分の名前も一層好きになった。そしてあの列車内の出来事を思い出して、日本も何か間違ったことをやったのだらうと思った。

「歴史は百年経たないと分からないよ。客観的評価は百年でも足りないかもしれない」

紀和は何となく父の言葉を理解し、百八十度掌をかえした様に日本が悪者だという世相も信用出来ないと思った。民族の違いを意識させないように、内地と同じように教育しようとした武男らの気遣いがいつか評価される筈だと思った。

クニが帰ると、一家は赤ちゃん中心に忙しくなった。紀和は登校前に、裏

の小川でおむつの洗濯をしたし、正一は自転車で山羊の乳をもらいに走った。武男は朝食や弁当を作る澄子のために明代を抱いた。しかしそれらの光景も、やがて紀和には懐かしい思い出となった。

三月二十日は紀和の卒業式であった。譲られた中古のセーラー服に寝押ししたスカートをはいて、髪を三つ編みにした紀和を、みち子が母と一緒に迎えに来た。明代を抱いた澄子が手を振って送った。

卒業後三日目の朝、小此木賢三と紀和の簡略な神前結婚式が氏神である菅原神社で行われた。お互いの近い身内の男女が十四五人集まった。親や親戚の人達は紋付き袴の人もいたが、賢三は濃紺の背広姿だったし、紀和は新しく仕立ててもらった銘仙の紫の矢絣に、澄子の細かい花の刺繍のあるピンクの帯を締め、白足袋に赤い鼻緒の塗下駄を履いていた。髪は三つ編みのお下げのままだったが、それがまた初々しく可憐に見えた。

小此木の家に昼食を兼ねた酒肴が用意されていた。昭代を背負ったねんねこ姿の澄子は、夕方は寒いだろうからと、紀和に羽織と手編みのショールの包みを置いて、武男より一足早く帰って行った。

四時頃のバスで賢三と紀和は身内の人々に見送られ、市比野の温泉宿に向かった。紀和は、澄子の羽織を着てショールをまとった。包みの中に木口（木製の対になった袋の口）の新しい布袋があった。中には昨夜澄子と点検した、新しい財布、櫛、化粧クリーム、手拭い、別珍の足袋が入っていた。賢三の長兄の寛治が、賢三に一升の米の入った袋を風呂敷に包んで持たせた。これがあれば一泊出来た時代だった。

宿は湯煙の立った川べりの老舗で、控えの間のついた奥の上等の部屋に案内された。湯を勧められ二人は男女に別れた浴室に向かった。浴室から湯気のたった川が見下ろせた。下を見ると一人の女が素裸で泳いでいた。それは二人を部屋に案内した女だった。南国の夕暮れは遅いと言っても、もう陽は山の端に掛かっていて、気温も下がっている筈だった。川の水は温かいのだろうか。女はむっちりとした白い肌を自分でも楽しむようにくねらせていた。紀和はふと男湯からも彼女は見えるに違いないと思った。彼女は自分の肉体

を賢三にひけらかしているのだろうかと思つた。十分ほどして女は消えた。

鶏肉の刺身と川魚の煮付けの夕食が済んで、先程の女が床を取りに来た。中年増と言うにはまだ若い、丸顔で腫れたような臉をした決して美人とは言えない女だった。

食事中二人はずっと殆ど無口のままだった。眼鏡を外した賢三の目がきびしいように思えた。浴衣の間から見える黒々とした彼の胸毛を、紀和はこわごわ眺めた。

枕元のスタンドの灯だけにして、二人は床に入った。賢三の手が伸びて、紀和の腕を掴むと、彼は床の中の紀和にのしかかった。顔にかかる生あたたかい息に口臭があって、紀和は思わず顔をそむけた。しかし賢三の唇は容赦なく紀和の唇を覆い、彼の舌が紀和の歯をこじ開け、しばらく跳梁し続けた。やがて紀和の胸をまさぐりながら、彼は彼女の中に進入を試みたが、紀和の体はまだ固いつぼみの様に閉じられていた。股間に彼の指のまさぐりを感じながら、紀和はこの営みの早く終わることを願った。やがて彼は何とか目的を果たし終わって紀和の上に倒れこんだ。体が離れると、紀和は緊張に疲れきって、すぐに眠りに落ちた。

ふと気がつくとな隣の賢三の姿が無かった。十二時は回っていただろうか。小一時間ほどして賢三がそっと戻って来た。紀和は知らぬふりをして身動き一つしなかった。

「夜中に何処にいらしたの」

紀和はやはり黙ってはいられなかった。

「何、もう一度温泉に浸かりたかったのさ。いい月だった」 賢三は眉一つ動かさずに答えた。その日の午後発の夜行列車で賢三は東京に戻り、紀和も実家に帰った。

紀和は、これが夫婦生活なのかと東京での生活に不安が募ったが、口には出さなかった。

十日ほど後に、小此木家に挨拶を済ませた後、紀和は衣類を選んで行李に

詰め、布団袋と二つチッキにして送ることにした。賢三と同じ夜行の東京行きで上京することになっていた。宮之城線の駅までは澄子と正一が、鹿児島本線の川内駅までは武男が見送った。

前夜紀和の部屋に来た武男は、

「これはお前にやろうと用意していたものだ。何もしてやれなかったが、これからも親とは言っても頼りにはならないと思いなさい。十分賢く使うように」

と言って札束を手渡した。結納の三千円そのままと、父からの五千円であった。新円の百円札が最高額の札だったし、切替えの処置で預金は封鎖されたこともあって、貴重な紙幣であった。きちんと束ねると、八十枚の札束は小冊子のようにであった。賃金が千七百円ベースなどと新聞が報じていたころのことで、一般の人の半年分の給料に当たると思われる額であった。紀和は京城から持ちかえった大きなボストンバッグの底に仕舞った。

東京駅のホームには、連絡してあった通りに賢三が迎えに出ていて、紀和のボストンバッグを持ってくれた。

「何でこんなに重たいんだ」

「お餅など持ってきたんです」

実はその底には、札束とともに紀和が京城から持ちかえった24色のパステルも入っていた。画用紙が手に入らなかったし、正一の落書きに使われたくなくてそのまま仕舞ってあったのだ。

二升ほどの米や着替えの入った手提げも、闇米の検閲もなく無事改札口を通ることが出来た。それも重かったが紀和が運んだ。

新宿の西口から外に出た。川内よりはるかに広大な焼け野が原が目に入った。甲州街道を初台に向かって歩いた。焼け跡の防空壕の中には人が住んでいる壕が点在していて、入り口の竹竿に洗濯物が掛かっていたりしていた。樽を家になっている人もいたようだったが、人には会わなかった。

黄昏どきに賢三の住む部屋にたどり着いた。焼け残りの家の二階の一間であった。ガタピシというガラスの格子戸を引くと、狭い玄関の中央に階段が

あった。年寄りのための木の手摺りがついていて、荷物を下げた賢三がやっ
と通れるといった階段だった。登るとT字の廊下になっていて左側の六畳間
が彼の部屋であった。内部は左側に一間の押入れがあり、その隣に手前が20
センチ程の板敷きの半間の床の間になっていた。

障子を開け放って電気を点けると、部屋の様子が廊下のガラス障子に写っ
た。首を伸ばせば同じような作りの右手の部屋の様子も写って見えた。紀和
は少しでもこちらが見えないようにと、開けた障子を右側に寄せた。

隣は兄妹の学生が住んでいるのだと賢三が言った。階下も家主の家族の他
に二家族が住んでいるということだった。

取り敢えず荷物の中から、ゆべしと丸餅を一個ずつ同じ屋根の下となる家
族に挨拶しながら配った。それは貴重なプレゼントと言えた。

台所は一カ所で、流しも大きめだが一つだけだった。蛇口は二つあったが、
二人が並んで使うのがやっとならであった。大家の奥さんが出てきて、あれこれ
説明した。

流しの前に二段のパイプの棚があり、鍋と釜は置けるようになっていて、
それぞれ置く場所は決められていたが、賢三の場所には何も無かった。右手
の窓側に並んでいるガスこんろは一家に一つずつ当てがわれていた。

「夕飯は兄貴のところでは用意してもらっている」

賢三の言葉に、義兄のために特に持参した餅とゆべしの包みを持って賢三
の後に従った。同じ細い路地を三軒ほど行った近い所だった。義兄浩二の部
屋は、その家の応接室らしい十畳ほどの洋間で、真中に畳が六畳敷いてあっ
た。本棚や窓辺に棚になっているものの、押入れがなく、布団は隅に積みれ、
唐草模様の大風呂敷で隠されていた。

「まあ、ようおじゃったもんせ」

明るい声とともに、お釜に鍋、切り身の焼き魚を載せた大きな盆を掲げた
絹江が入って来た。傍らに盆を下ろすと、大仰に賢三にきちんとお辞儀をし
た。そして紀和に向かっても大げさに几帳面な初対面の挨拶をした。絹江は
「あの人は今風呂で、もうすぐ上がって来ましど。今夜はご馳走がごあしど

なあ」

と言いながら手際よく配膳をした。お湯割りの焼酎も土瓶に用意されていた。お釜の中は人参と油揚げの混ぜ寿司で、魚は切り身で薄い色の味噌漬けのようだった。

「おう、帰ったか。紀和さん。賢三から話は聞いていたよ。よろしくな」

浩二は賢三より細身で、豊かな洗い髪が額にかかって、紀和はヨカニセ（男前）だと思った。

湯飲みの焼酎で乾杯をして、歓談が始まった。白身の魚の吸い物を注ぎ終わった絹江は、話に割って入った。饒舌で仕種がコケティッシュに見えた。一方紀和は、気押されて、ただ頷いたり首を振るばかりであった。二時間ほど経った。洗い物を盆に整理して、深く礼を述べ紀和は、賢三と家に戻った。自分のまだ知らなかった上機嫌で饒舌な賢三は、酒が入ったからなのか、相手が身内だからなのか訝った。

その夜は一組しかない布団で寝た。浅く酔った賢三は激しく求めて来た。紀和は殆どなされるままに身を任せていた。翌朝、朝食は持参の餅で済まそうと、ヤカンと餅を載せた皿を手に下に降りた。居合わせた階下の主婦の一人が、世話好きらしくあれこれ細かいことを教えてくれた。紀和はその主婦に焼き網を借りて細火で餅を焼いた。ガスを使うのは京城以来であった。

七時半頃、夫を送り出した。ちゃぶ台はそのままにして、紀和は点けたままのラジオをぼんやり聞いていた。八時半頃小さな足音がして、驚いたことに絹江が現れた。紀和が昨夜の礼を言うのを遮って、

「ねえ、おはんな嫁ごでしょう。食べて、ハイサヨナラはないと思うよ。最後まできちんと片づけて帰りやんせ。賢三さんに恥をかかせる訳にはいきもはんで、黙って帰したけど」

紀和は絹江の鹿児島弁まじりのぞんざいな口調に驚いた。紀和も昨夜は最後まで片付けて帰るべきか一瞬考えたが、知らぬ家の共同炊事場に行くことに気後れがしたのだった。

しかし絹江の目的はそんなことを言うためというよりも、偵察といった感

じで、ジロジロと部屋の中を見回した。紀和の顔も探るような目を見た。紀和は汽車の旅の疲れと夜中に賢三に攻めたてられて、体は綿のように疲れ、腫れぼったい目をしていた。抜け目ない絹江は小意地悪そうな笑みを浮かべて帰って行った。

紀和は愕然としていた。兄嫁は何も知らない自分を扶けてくれる存在だと漠然と考えていた。あの表情では、留守にはデレッと怠けている女だと告げ口されかねないと思った。

気を取り直して立ち上がって、先ず必要なものを揃えなければと思った。床の間に古い箱膳があって、覗くと中には一人分の食器と小皿が二枚入っているだけであった。

チッキの行李と布団袋が届いた。ポストンバッグから三千元だけ出した。残りの札束の上にセーターなど冬物を詰めて押入れの行李の奥に隠すように置き、上に布団を載せた。結納の三千元は、必要な道具を買うべきだと思っていた。

ともかく鍋釜を買わなくてはならない。チッキの中には三升の米が分けて入っていた。見つければ没収される時代で、それだけの量を送るのも冒険だった。

昼前、紀和は朝の台所で会った階下の主婦に、いろいろな買物のことを相談した。そして彼女に教えてもらった甲州街道の裏側の狭い通りに出掛けた。道路の両側にぎっしりと様々な商店が並んでいた。戦火を逃れた店やバラックの店が混在していて、活気があり何でも手に入りそうに思えた。

荒物屋でニュームの鍋と木の蓋のついた釜を買い、自分の茶碗類や小鉢、皿を中に入れてもらった。リンゴ箱も二個、箒やはたき、なども求めて全て配達してくれるよう頼んだ。少し先の店で人絹のペラペラした布を二メートル買った。

主婦の殆どが腕に買物籠を掛けているのを見て、紀和も藤製の買物籠を買った。そしてとても嬉しい気分になって、行き交う主婦の買物籠と見比べるのがだった。味噌、醤油など調味料に野菜と塩鮭二切れも買って籠に入れた。

塩鮭は鹿児島では御馳走であった。パンを買うのには外食券が必要なのだが、ヤミのパンを売る店があって、メロンパンというのがあった。紀和は昼食にそれも一個買った。

家に帰ってメロンパンを初めて食べた。戦後は味気ないコッペパンとしかないと考えていた紀和は、新しい生活が始まるという期待も頭をもたげた。いそいそと店から届いたリンゴ箱を重ね、包み紙を敷いて食器や調味料など入れ、上から黄色い布を被せた。そして自分は料理は殆ど知らないと気付いた。素材そのものが田舎には無かった。きっと新聞には載っているだろうと思った。賢三は役所で読むのか、家では新聞を取っていないかった。

六時半頃、賢三が帰宅した。彼は洗面所で顔を洗うと紺の袴の着物に着替えた。食卓の脇には澄子の心づくしの新しい座布団が二枚敷かれていた。リンゴ箱にも買物籠にも賢三は何も言わずに夕食を済ませた。紀和は

「新聞を取りたいんだけど」

とおずおず聞いた。

「読みたければ取ったらいいだろう」

賢三は無造作に言った。その日は風呂がなかった。

風呂は月・木の週二回大家さんが焚いて、入浴する。その後を月曜は階下の家族、木曜は二階の家族がもらい湯をすることになっていた。銭湯も商店街の中にあるにはあったが、みんな月一回行くくらいのものであった。

「弁当は作ってくれ」

とだけ言って、しばらく黙念としていた賢三が三尺帯を締めなおし、羽織を羽織った。

「ちょっと出掛けてくる」

というと紀和を尻目にさっさと階段を下りて行った。

十一時過ぎだろうか、戻った賢三は相当酔っていた。先に休んでいた紀和の足を踏んで倒れ込んだ。紀和の知らないきつい酒の匂いがした。賢三は左手で紀和の固い乳房をまさぐりながら眠った。紀和はそっと手を外し、布団の隅に出来るだけ離れて身を移して眠った。

翌朝も絹江がやって来た。

「何ちなあ。自分の亭主くらい止めておきやなれんと。ゆうべはうちの人まで新宿に飲みに行きもしと。これじゃあ以前と全然変わりもはんじゃないね」

絹江は毒づきながらまた見回して帰った。隣の女学生に聞こえているだろうと思うと屈辱感に苛まれた。

それでもその日は新聞配達を頼み、ニュームの弁当箱と大きめの目覚し時計を買って何となく気が晴れた。晩酌の用意をすればよいのかと、焼酎の五合ビンも買った。肉とカレー粉を買って作りなれたカレーライスを作った。

「お酒召し上がりますか」

と聞く紀和を手で制した。黙々とカレーを食べ終わると、また昨夜のようにさっさと出掛けた。その夜は十時頃には戻り、紀和を求めるでもなく眠った。

朝、習慣のように絹江がやってきた。新しい目覚し時計を見て、思いついたように言った。

「今度の日曜日、新宿に映画を見に行もそや。帰りにお汁粉も食もがないし、肉饅頭もあるかもしれもはん」

その日は大して毒づくこともなく帰った。

日曜日の朝になった。十一時頃、浩二と絹江が連れ立って現れた。絹江を中に三人が喋りながら先を歩いた。絹江は時折身をくねらせて賢三の背に手をかけたりしていた。そして振り向いては

「早う歩かんね」

と勝ち誇ったように紀和に声をかけた。武蔵野映画館に入った。シャルル・ボワイエとイングリッド・バクマンの「ガス燈」がかかっていた。紀和は、女学校の全員が映画館に引率されて見た「ユーコンの流れ」が最初の洋画で、今度が二回目だった。夜な夜な外出する夫、炎の細くなるガス燈、宝石を手に入れるための周到な企みなど全て心に焼きついた。これは外人の話だとは思っても、何か夫に対する不信感のようなも

のが紀和の頭をよぎった。

映画館の横町一帯は大きな闇市だった。出入口には靴台にするミカン箱を前に、靴磨きの大人や子供が五六人並んでいた。バラックの店が通りの両側に連立していて、沢山の人通りでほこりっぽかった。中古の軍服や軍靴など売る店、お米に換えられたら着物の山や、雑貨の店に混じって、蒸しパンや、饅頭の店、奥には禁制なはずなのに駐留軍の横流しのチョコレート、ビスケットや缶詰などもあった。

紀和は革靴が欲しかった。賢三に告げると

「底がすぐ減るぞ」

と言ったものの反対はしなかった。紀和は運動靴のような紐のついた丈夫そうな黒い革靴を買って自分で支払った。

絹江はフリルのついた水色のワンピースを浩二にねだっていた。色白で胸の豊かな絹江にはよく似合う。賢三が腰ポケットから財布を取り出し支払った。

雑踏の一角で四人は木箱に腰を下ろし、丼を抱えて揚げかすの浮いたうどんを食べた。誰も支払う気配がないので紀和が支払った。

夕方近くなった。闇市から駅の方に歩くと、長いパーマの髪を風に靡かせて派手な女がG Iを掴まえた所に出会った。「ユーメイカム、ウイズミー」

浩二がG Iの口真似をして絹江を抱えて歩きだした。紀和は腕を組んで歩くのもいいなとは思ったものの、不器用に靴を下げて歩くだけだった。賢三も黙々と歩いていた。

夕食の時紀和が切り出した。

「多少のお金は持っているけれど、まだ買わねばならないものが沢山あるの。生活費はどうなっているんですか」

賢三は

「給料日は二十五日さ」

と言ったきり、新聞から目を離さなかった。紀和はアイロンが必要で、その分を引いて、残り二十五日までの八日間を持たせねばならないと、頭の

中で計算していた。物価は週単位で上がっていた。先週一円の物が今日は一円六銭という案配である。

賢三は日曜と風呂のある日の他は、殆ど夕食後ブラリと出掛けた。絹江の所だと紀和は確信していた。浩二が居れば二人で新宿に出るのだろうが、浩二が留守だったらと考えると紀和は体が熱くなった。

給料日が来た。賢三は聖徳太子の百円札を七枚を紀和に渡した。給料袋の三分の一ほどに見えた。

「家賃、光熱費はこれまで通り俺が払う」

と言った。紀和は去年ならともかく、今は去年の三倍も物価があがっていた。これではとても無理だと思った。しかし黙っていた。家賃は六百円と聞いていた。残りは何になるのだろう。

翌朝、絹江が現れて言った。

「賢三さんはよか人よね。私に今までんご小遣いをくれもした。あんたはやってしがないやっど。飲み屋のつけも減っちょいもはんなお」

紀和に同情するような口調で、賢三の自分に対する気持ちを誇示した。やはりそうかと紀和は思った。そして次第に紀和の顔から微笑みが消えた。

家計のやりくりは頭痛の種であった。夫から渡される金の価値は日に日に下がって行く。物価は一斉に上がるのではなかった。先週は味噌が値上がりし、今週は醤油が値上がりするといった調子で、一カ月経ってみれば全体が二割五分も上がっているのだった。一応の生活必需品も揃って、あとは給料内で生活せねばならない。細々と節約の日々である。

毎朝、旬の野菜のあれこれを荷車に積んで来て、鈴を鳴らして知らせる行商が通った。どこからか復員して来たと思われる破れた戦闘帽を被った日焼けした若者だった。まだ十八歳にも満たない紀和が、財布の底を覗くようにして買うのを見るとどうにも気になるらしかった。彼は棒秤で量るいんげんなど、棒の先が飛び上がるくらい紀和におまけした。他に客のいない時などは、トマトを一個をそっと籠に入れたりしてくれる。紀和は小声で「どうも

ありがと」と言って素直に受けた。絹江と顔を合わせたくない紀和は、下を見て最後と思われるタイミングで下りることも覚えた。

酒屋の兄ちゃんも、経木に味噌を注文の百五十匁量りおわると、
「ハイおまけ」

と一匙分くらいを上乗せしてくれた。そして紀和は買物をする時が一番楽しかった。店員とのやりとりが唯一の会話らしい会話だったのだから。

七月、ボーナスが物価との調整も兼ねて支給され、一息つくことが出来た。さすがに絹江もこの頃は顔を出すことが少なくなって来た。

郷里と違った東京の猛暑の日々が続いた。田舎の夏の午後はナカエの障子を開け放って昼寝をしたものだった。木立を抜け、打ち水した庭を通ってくる風は実に心地よかった。東京にはその風がない。団扇をパタパタさせて、ただ耐えるばかりである。

その暑さの中、紀和は体の変調に気づいていた。二ヵ月メンスがなかったし、これはつわりだと思った。澄子の様子をみていた紀和は、自分の妊娠を確信しながらも、しばらくは賢三に告げなかった。子供が出来たと知ったときの彼の反応が分からなかったが、紀和は赤ちゃんが欲しかった。

ある朝、絹江が来た。

「今度の日曜に江ノ島に海水浴に行もそや。賢三さんもOKち言やした」

紀和は一応同意した。しかし当日の朝「頭痛がする」と言って断った。三人はあっさりと紀和を残して出掛けた。

紀和は始めから行く気は全くなかったが、断れば理由を尋ねられる。下手な言い訳で、変に勘ぐられてはと用心して、当日まで不参加を知らせなかったのだ。紀和もいつかそんな憶測をして行動するようになっていた。

階下の主婦に教えてもらって、伊勢丹近くの日赤病院の産婦人科に行ったのは九月に入ってからだった。

産婦人科の診察台でのポーズの恥ずかしさは、田舎の澄子は多分体験したことはないであろうと思った。カーテンの陰で下着を着け終わると、隣室でカルテに書き入れをしている中年の医師の側に座るよう看護婦に案内された。

医師に最終の月経日など聞かれた。

「おめでたですね。予定日は四月十八日です。まだ流産の危険がある時期ですからね。無理な行動はしないように。月一回は診察を受けなさい」

医師はビタミン剤を飲むよう指示した。看護婦が

「来月は帯ですから晒を一反持っていらっしやい」

と言った。

紀和は、最近こんなにも物価が高騰しては、仕舞ってある現金の価値はどんどん目減りしている、早く品物に換えるべきだと思っていた。そうだ、出産の準備に使おうと思った。

翌日、行李の底から百円札を二十五枚取り出した。全部を使ってしまうのも心配だった。胸をはずませて商店街に出掛けた。晒を二反、入院時の寝巻用に浴衣地を二反、ベビー服用にネルを一反、ガーゼも一反と買って大風呂敷に包むと、首から背負って家に帰った。

その夜遅く帰った賢三が語気荒く紀和をなじった。

「お前、今日は何を買ったのだ。俺は何も聞いていないぞ」 ああ絹江に見られてしまったのだと紀和は観念した。

「この所調子が悪かったので、きのう日赤に行って診て頂いたら、妊娠してるって言われました。嫁ぐとき父から貰ったお金があったから、出産用に反物を買ったんです」

紀和はきつとなって答えた。

「何でそんな大事なことを俺に言わない」

「あなたこそ私に何をしているか何も言わないでしょう。生んでいいのかわからなかったんです。でも私は生むと決めましたから」

初めての口答えに賢三は黙った。気まずい空気が流れた。賢三は黙したまま紀和に背を向けて寝た。この人は生むことに反対してはいないのだと紀和は思った。そして天井を見ながら、この子だけは自分の味方になってくれるだろうと、祈るような気持ちでゆっくりお腹をさすっていた。

翌朝、片付けを済ますと便箋を取り出した。紀和は実家への便りを月二回は書いていた。内容は身辺のことばかりで、浩二や絹江のことは何も知らせていなかった。妊娠は澄子に真先に知らせたかった。半年前まで毎日抱いていた明代の柔らかな感触を思い出し懐かしかった。久々に和やかな気分で書いた手紙をポストに入れた。

半月ほどして祖母タミから小包が届いた。浴衣が五枚と黒砂糖の袋が入っていた。「今は稲刈りの季節になって忙しいので、おむつ用に取り敢えずこのまま送る。赤ちゃんの肌着や着物は、冬になったら縫って送るが、簡単なおむつはそちらで縫ってほしい、栄養と休息を心掛けるように」と書いた紙片もしのばせてあった。澄子からは、赤ちゃん用の布団は作って送るからという返事があり、筆字の祝いの葉書も武男から届いた。私は決して不幸ではないのだと紀和は自分に言い聞かせた。

賢三の夕食後の外出は相変わらずで、酔って帰ることも多かったが、心なしか早く戻るようになった。そして紀和を求める回数はぐっと少なくなった。もともと紀和に対しては、一方的に自分だけ果たして終わる行為だったから、胎児を気遣う紀和には我慢の出来る範囲のことだった。紀和はただただ無表情、無抵抗であった。

帯祝いは戌の日と聞いていた紀和は、五ヵ月に入ったある戌の日、晒一反を持って日赤に行った。看護婦は紀和に端を持って立たせ、二つ折りの細い帯にして、お腹の前で折り返しながらかちんと巻きつけた。やはり気も引き締まった気分になった。紀和は伊勢丹の地下で小鯛を二匹買った。

食紅で桜色に染めた豆ご飯を赤飯に見立てて、麸の吸い物に尾頭付きの小鯛の塩焼、漬物、煮豆の小鉢を並べた。

「帯祝いでした」

紀和はにこりともせずに行った。無言で食べ終わった賢三はポツリと言った。

「鹿児島では目刺しとワカメをよく食べたもんだ」

確かにどちらもカルシウムが十分あって、妊婦にはよい食べ物に違いない。賢三が自分に食べるように勧めているのだろうか。そんな単純なことも聞き返せない自分が情けなく苛立った。多分それを食べた方がいいというつもりなのだろうと思った。

冷蔵庫などない時代で、買い置きは出来なかったから、買物は都会の主婦の日課であった。賢三の意図はともかく紀和は、翌日乾燥ワカメと目刺しを買って帰った。目刺しは五匹一刺しになっていた。夕食に二匹ずつ食べて、翌日の昼に紀和が残りを焼いた。毎朝の味噌汁にはワカメを必ず入れた。週二回ほど夕食は目刺しになった。

木枯らしが吹き抜け急速に冷え込むようになり、故郷の囲炉裏が懐かしい頃になった。真っ赤なオキを火鉢に移すだけで、自分の暖房は済んだものなのに、ガスで炭火をおこしながら、このガスは無駄になって勿体ないと思った。京城時代のオンドルは懐旧の外にあった。

小さな火鉢にしがみついているは何もする気にならないので、紀和はアンカの置き炬燵を買った。50センチ四方のやぐらの下に陶器のアンカを置く。タドンの子供のような豆タンをガスでおこしてアンカの灰に埋めた。毛布と掛け布団をやぐらにかけ、六畳間の暖房の出来上がりであった。

賢三の夜の外出も毎夜ではなくなった。出産の費用のために飲み屋のツケを減らしておこうとしているのだろうと紀和は思った。当然絹江の所へも毎夜は行っていない。

外出しない夜の賢三は、足を炬燵の横に突っ込み、長い方の掛け布団を腰まで引っ張って腹這いになり、スタンドを引き寄せて雑誌を読んでいた。紀和は傍らで浴衣をほどいておむつを縫ったり、自分の寝巻を縫ったりした。賢三の靴下に電球を入れて擦り切れそうな所の補修をする夜もあった。こんな夜は、はた目には穏やかな夫婦生活に見えるだろうと紀和は思った。そしてどんなに近くにいても、心は遠く離れているという現実が存在するという事を淋しく実感していた。紀和は、自分が賢三に心を開くことが出来ない

根本原因はなんだろうと自問自答してみる。まず、自分がどんなに家計のやりくりで苦勞しているかを知ろうともしないで、絹江に小遣いをやるという賢三の行為が許せない。これが嫉妬というものだろうか。賢三がまともに紀和に向き合い、気づかう姿勢を見せることがないのは、自分に対する愛情がないからだと思ってもそれは当然ではないか。時折は脂粉の匂いを漂わせて帰る賢三の飲み屋の女たちや、絹江との交わりに腹を立てているのではない、賢三の心の問題だとも思った。

賢三は自分が主人であるという意識を剥き出しにして、こわ面で、全て一方的に命令調の言葉を発する。

「結婚は最初が肝心よ。紀和さんは賢三さんだけ何を考えているか分からない人よ。騙されたり負けたりしないように、賢三さんがしっかりしていないといけないよ」

繰り返し言っているだろう絹江の言葉も、推測出来た。賢三は絹江の前では顔も心も緩めて、気易い態度をとる。それが一層紀和をこわばらせる。

暮れ近く紀和は風邪をこじらせた。売薬では熱も下がらなかったが、賢三には紀和の容体は眼中にないようだった。

だるい体に鞭打って、朝食、弁当を作って送り出した。そして一人になると、紀和は猛烈な孤独感に陥った。誰かに自分の苦しさを訴え、甘えたかった。

十時頃絹江が現れた。

「何ね。風邪を引いたと。強か薬は飲んだらいかんよ」

絹江は臥せている紀和の傍らに畳まれたおむつの束を複雑な眼差しで見ながら言った。

「買い物くらいなら、ついでだから買って来てあげるよ。何が要るね」

紀和は思いがけない申し出に、とっさに返事に詰まった。往来に例の八百屋が来て、鈴を鳴らしていた。絹江はさっさと階段を下りて行ったが、やがて手に大根を下げて現れた。「ごひいきの紀和ちゃんが風邪なんだと言って、半値にしてもらったよ」

絹江の開けっ広げな笑い声が今日は不快に感じなかった。夕暮れ近くに絹江がまた現れた。手にした新聞紙の包みを開けると経木の上に大きなブリの切り身が二切れあった。

「大根と味噌汁にすれば、簡単だし、あったまるよ」

絹江はさっさと帰って行った。郷里では御馳走とされるブリがここでは簡単に食べられる。紀和はゆっくり起きて、銀杏切りの大根を下煮して賢三の帰りを待った。賢三が顔を洗っている間に、大根を柔らかく煮た鍋のたぎった湯の中に、湯通ししたブリを入れ、味噌を溶かし込んで煮た。

「旨い。これは俺の好物だ」

「今日、絹江さんが買って来てくださって・・・」

紀和は、賢三に初めてほめられたことよりも、絹江が賢三の好物をよく知っていることにまた胸が騒いだ。賢三は食べおわると、そそくさと羽織を羽織って出て行った。

四月十八日、予定日通りに出産の兆候があった。賢三は出勤したあとのことだった。紀和は公衆電話で役所に連絡したあと、タクシーを掴まえた。一応絹江にも知らせておくべきだとは思ったが、手を貸してほしくなかった。運転手に頼んで、二階から用意してあった大風呂敷の包みを下ろして積んでもらった。絹江の家の前で車を止めて、ドアを開けた。

「これから入院するの。タクシーの運転手がみんな運んでくれるから、心配しないで」

と告げた。臙脂の縞のセルの着物をしどけなく着た絹江は何処か疲れた艶のない顔をしていた。彼女は

「ええ、そうね」

と言っただけで、外には出て来なかった。

田舎の素朴な出産とは違って、明るい産室に何人もの看護婦が行き交っている。紀和はこちこちに緊張していた。初産ということで思いのほか時間がかかった。朝食はベッドの上で全部吐いてしまった。夕方六時頃、賢三が顔

を出した。間歇的に起こる陣痛の最中で、目の眩むような痛さを必死でこらえていた。看護婦が

「この間隔だとあと二時間ほど掛かりますよ」

と言うと賢三は「また来ます」と告げて帰って行った。

八時半頃男の子が呱呱の声を上げた。分娩台の紀和に看護婦がタオルにくるまれた赤子の顔を見せた。髪が黒々として大きな口をしていた。黒い髪はワカメの効用かと思った。

翌日の午後、浩二と絹江が来た。赤子は紀和のベッドのすぐ脇に横付けされた小さなベッドに寝かされていた。産湯を使ったあとでよく眠っていた。

二人は赤子の顔を覗き込んだものの、赤ちゃんについて何の感想も言わなかった。紀和に「おめでとう」の一言もなかった。紀和はお世辞にも可愛いとか、どちら似とか言ってほしいと思った。

「賢三はまだ来てないのか」

浩二が聞いた。

「夕べ出産前には来たんですが」

「じゃあ、もう少ししたら来るだろう」

二人は椅子に腰を下ろすと、紀和を全く無視してしゃべり始めた。

「お前、賢三が不自由しているのに役にたたないで、あいつは可哀相だったな」

「何を言いやっどな。あんたがあんな病気を私に移したからじゃんさお。私がどんなにいやな思いをしているか。本当はがいか。私だって賢三さんが可哀相だと思っちょいもしど」「それはお前が、俺がまだ治りきっていないというのに、やってやってとせがんだからじゃないか」

「大体そんな淋病の商売女と寝たあんたが一番悪かどお」

紀和は全身の血の気が引いていくような気がした。こんな会話を、出産したばかりの新妻の枕もとでする夫婦がいるだろうか。

賢三が現れた。賢三も赤子を覗き込んだただけであった。紀和はひきつった顔をしいた。言葉は何も出なかった。

賢三の顔を見た絹江ははしゃいだ。

「ねえ、夜の新宿を楽しんで帰りもそよなあ」

絹江は、紀和に手を振ると、男性二人を促し、連れ立って出て行った。

紀和の頬に涙が流れた。賢三と絹江の仲は気づいていた。しかし、これで浩二も交えて絹江を共有しているという関係が明らかになった。同じ役所に勤めていても、浩二より医師として相当な高給取りである賢三に、二人してずっとよりかかって来たのだ。

「今の今だって私をだしにして、賢三に新宿でおごらせるために来ただけだったのかわ」

と紀和は思った。三人に対する憤りが憎しみに変わって、紀和の心深く沈んでいった。

一週間後、紀和は退院した。賢三が休みを取って、朝から紀和の荷物を整理し、タクシーを呼んだ。

赤子を抱いて車に乗った紀和は、四月末の一週間とは外界がこんなにも変わるものかと驚いた。入院時には芽吹きのおくもりを見せていただけの木々が、今は一斉に若緑の葉に包まれて目の前に連なっている。焼け跡の雑草の緑もみずみずしかった。

二階の自室に戻ると、部屋は以外に整理されていた。半間の物置になっている床の間の上に「命名 恒夫」と書かれた半紙が張ってあった。

「俺はこの恒という字がなぜか好きだ。どうだ」

賢三は珍しく紀和に同意を求めた。紀和は黙って頷いた。紀和もいい名前だと思った。賢三は自分の布団の下になっていた紀和の布団を引きずり出した。そんな行為も初めてで、紀和はそれで自分の床を取り、横になった。

絹江からの海苔むすびがちゃぶ台の上にあった。賢三が湯を沸かし、茶を入れた。複雑な気分では紀和は梅干しの刻み込まれたおむすびを食べた。少ない親族しかいない東京では、お互い世話にならずには生活出来ないのだと観念するしかないのだと思った。

役所の互助のシステムで、半日の家政婦を三週間派遣してくれる。午後になって、家政婦が来た。手慣れた様子で、先ず下の風呂場で産湯を使わせるという。彼女は、紀和が武男からの残金を叩いて買った新品の小判型の盥に、タオルや着替え一式を入れて抱え、下りて行った。

家政婦派遣の期間が過ぎた。恒夫は紀和の豊富な母乳で順調に育っていた。紀和は、長い木綿の反物で作った背負い紐で、一人で苦労して恒夫を背負うと、毎日午後一時からの銭湯に一番乗りをする。

東京の銭湯の脱衣場には地方出の少女が二三人いるのが常だった。母親から赤ちゃんを着替えを受け取ると、並んでいるベビーベッドの上で器用に脱がせ、母親に手渡す。そしてすぐに持参したタオルと着替えをベッドに広げて、湯上がりの赤ちゃんを待つ。やがてホカホカの赤ちゃんが上がって来ると、受け取って素早く着せ、母親が上がって来るまで面倒を見て、背負わせてくれるのだった。

紀和は入浴の後、恒夫を背負い、役所の女性からのお祝いの白い長編みのケープを纏うと、日の高いうちに買物をすませるのが日課となった。

賢三は、帰宅すると恒夫を上から見下ろすものの、抱き上げることはなかった。それは男のすることではないとでも決めているのかと紀和は思った。そしてこの人とは、家庭の団欒などは望めないということ、再確認していた。

出産した紀和の体は成熟していた。感覚も敏感になり、肌にも潤いが出て滑らかになっていた。夜の行為にも、背筋をよぎる快感があって、思わず賢三にしがみつこうとする自分を、紀和は懸命にこらえた。

「私はこの人を決して許してはならない。肉の喜びなどに負けてなるものか」

と自分に言い聞かせていた。

隣室に恒夫の泣き声が邪魔にならぬよう、常に神経を使っている紀和は、これから恒夫が這いだしたら、二階は危険だと思った。ある夜、賢三に転居

するよう頼んだ。

「そこの堤の向こうに都営の高層住宅を建設中なんだ。入居許可ももらってある。あと二ヵ月の辛抱だ」

この賢三の言葉は紀和を喜ばせた。戦後初めての高層公営住宅である。どんな人が住むのだろうと羨望の念で見上げていた建物だった。ただ自分の金は全て消えていた。

「父からのお金はもうありません。恒夫も重くなって乳母車がほしいと思います」

賢三は引出しから五通の熨斗袋を出して紀和に渡した。武男や紀和の親族からの出産祝いであった。

「今まで知らせてくれないで、何もお礼も言っていないではないですか」

「礼状はすぐ出したさ」

「小此木家は祝って下さらなかったのですか」

「いや、相当もらったがね」

賢三は言葉を濁した。きっと絹江たちのために使ったのだと紀和は直截的に信じた。

引っ越しとなるとまた物入りである。乳母車は全てが一段落してからにしよう、紀和は熨斗袋から百円札を抜き出しながら考えていた。

新しい住宅は四階建てで、賢三達の住まいは三階だった。六畳、四畳半それに三畳の台所があったが、浴室は付いていなかった。銭湯に行ったり、買物をする日課に変化はなかった。一家としてやっと孤立出来て、平凡な都会の家庭生活が始まる。よそ目には幸福な家族に見えたはずだった。

しかし夜は夫婦間の冷たい空気がゆるむことはなかった。紀和は、昼はコンクリートの壁の中で、長い時間をただ恒夫と二人で居る。向かいのドアの住人は気難しそうな中年の夫婦で、簡単に声を掛けられそうもない雰囲気だった。絹江の毒舌も届かぬかわりに、知る人もなく、会話の相手は返事の返ってこない恒夫だけである。紀和は一層閉鎖的な暗い気分になり、行き場

のない孤独感に苛まれた。

それまでの一つの台所で、他愛ない会話を交わしながら、他の家の献立を横目で見ても料理していた共同炊事場が懐かしく思えた。都会の主婦には、他人の家庭に首を突っ込んだりしない良識があった。うわさ話がパッと伝わる田舎雀とは違い、感じるがあっても話題にする限度を心得ていた。それはお互いの声の届く程の狭い家に、上手に住む秘訣でもあった。紀和は人間らしく生きることは何も物理的に個々の隔てを作ることではないと思った。

冷えた家庭はますます冷えた。かすがいたるべき恒夫にも賢三は無愛想だった。以前は帰宅してからの外出だったが、今や帰宅そのものが遅い日が続くようになった。買ったばかりの冷蔵庫は、用意した賢三の夕食入れとなった。

とうとう二人の気まずさは爆発寸前まで進んだ。紀和は、理性で懸命に恒夫に当たり散らしたい自分を抑えた。それは表情に出て、目がヒステリックに光って来た。賢三は自分から願い出て、三多摩の無医村に新しく出来た診療所に転出することにした。単身赴任だった。

別居はまさに正解と言うべきだった。お互いがホッとして新しい生活を始めた。賢三の帰宅が月何回であろうが、女遊びをしようが、絹江のところに行こうが、紀和はもうどうでもよかった。帰宅すればそれなりにもてなして帰した。

やがて恒夫が幼稚園に通うようになり、紀和は近くの画塾に週一回ほど通うようになった。四十歳ほどの戦争未亡人の画家が、美術大学受験生を相手に開いている小さなアトリエで、画材さえ持参すれば、ささやかな月謝で何時間でも好きなように描かいていてよいと言われた。紀和は姉が出来たように思えた。

賢三は天気がよければ帰宅して、恒夫を連れて動物園や遊園地に行くようになった。月曜の朝早く出勤する賢三に、恒夫は次回の外出をせがんだ。賢三も満更でもない顔で、よきパパの出勤ぶりを演じて別れるのだった。恒夫の成長に賢三の存在が必要なことは紀和も理解出来たから、恒夫が賢三に懐

くことを遮ることはなかった。感謝の気持ちも芽生えていたのだが、切り口上以上の礼は口から出なかった。

浩二は埼玉県に近い西武線の沿線の都市に転出した。淋病がたたったのか、二人の間に子供は出来なかった。それでも賢三の絹江へのなにがしかの送金は続いているらしかった。

瞬く間に十数年が過ぎた。

昭和三十七年の初秋、突然浩二、賢三の兄寛治が交通事故で亡くなったという報が入った。浩二も賢三も急遽鹿児島に向かった。紀和は恒夫を連れて、絹江と一日遅れで列車に乗ることにした。祖父の義一は七年前に亡くなり、その折は孫兄弟のみが帰郷した。

寛治は小学校の教師を二十五年も勤めていて、現役だったから同僚、教子など多数集まって、大変な葬儀であった。三十三年前、夫亡き後気丈にも三人の息子を育てた七十一歳のアキと、義一のあとの農業を頑張っている寛治の妻富子が残されたのだ。

寛治の息子敦夫、娘の佳子はすでに高校を卒業して、東京に出ていた。敦夫は来春卒業で、大手の電機会社に入社が内定していた。佳子も短大卒業後は東京で働きたいという。

寛治の友人の一人が

「最近川内市内に大きな工場が出来た、その診療所で医師を求めている」と賢三に知らせた。

集まった親戚たちは、口々に賢三に戻って来るように説得をはじめた。賢三はなかなか首を縦に振らなかったが、内心はそれもいいかもしれないと思っていた。単身の診療所の勤務にも疲れを感じていた。

「やっぱりそうするより仕方ないかなあ」

と同意すると、全員が次々と感謝の言葉を述べた。いつもは座の中心であった浩二夫妻は、今回は影が薄かった。

紀和もそろそろ今の住宅を出たいと思っていた。浴室のない公営住宅などは、その頃はもう時代遅れだったし、コンクリートの外観も見すばらしくな

っていた。紀和の実家、秋山家は全員元気で心強いし、友人もこちらには居る。問題は恒夫の学校であった。田舎からの進学は至難のように思えた。

「大丈夫。鹿児島市内に私立の有名な進学校が出来ているんだ。恒夫ちゃんなら心配いらぬよ。医師の子供は優先的に入れるようだし」

とうとう紀和もその気になった。

工場の診療所は未だ専属の医師は決まっていなかった。賢三は、来年四月からの勤務と内定した。

小此木家では町の商店街近くの畑を百五十坪ほど潰して、急遽四十坪ほどの家を建てることにした。

東京に戻った紀和は、いずれ田舎では必要だと思い、車の運転を習うことにした。神武景気後の岩戸景気が始まり、ぼつぼつ自家用車を持つ家も出はじめていた。まだはしりの教習所に通うことは、新鮮で、誇らしくもあった。

その年の暮れ、一足早く紀和は建物だけ完成した家に入居することにした。恒夫の進学のために鹿児島に居住しておく必要があると思われた。賢三は三月の年度末に移動することになっていた。彼は家族の転居を手伝い、正月を祝うと三日には職場に戻った。

四月、無事私立の高校に入学出来た恒夫は、市内の寮に入るようになった。再び賢三と紀和の二人だけの生活が始まった。酒量も相変わらずだったが、家で飲むようになった。

それぞれの部屋を持ち、二人の距離は縮まることはなかったが、そもそも初めからそんな努力をしようなどとは、お互い考えたことはないようだった。

朝食後、賢三は紀和に中古のフォルクスワーゲンを運転させて出勤し、午後五時には会社に迎えに来させた。時々夜遅くなってタクシーで帰ることもあったが、殆ど判で押したような日々となった。

庭のえ込みや花畑、菜園を作ることは、全て紀和任せになり、台所にはプロパンガスが入っていても、風呂は薪を燃やせねばならないなど、作業が増

えたことが紀和にはかえって新鮮であった。ぼつぼつ近所の主婦との交流も始まった。高校時代の友、みち子は、この町の呉服屋の奥さんに納まっていた。彼女はいい客が増えたと、ちょくちょく顔を出した。そして結婚来味わったこともないほど、気持ちは穏やかであった。

三十分も車を走らせれば、実家を訪れることが自由に出来ることは何にもまして有り難いことであった。父武男は定年後、地元の教育委員会に嘱託で勤務していたが、昼食には家に帰って来て、楽しげに時節の解説をするのだった。正一は福岡の大学を卒業し、同地のデパートに勤務していて、すでに職歴結婚していた。明代は、共学になった県立高校に通っていた。背の高いきりりとした器量よしで、バスケットボールの主将をしているという。澄子はまた姥姿といった風情があって、紀和の車で鹿児島市内に買物に行くのを楽しみにするようになった。

紀和は恒夫の高校のPTAの会合には欠かさず出席した。県外の子供も集まる私立高校に進学させることが出来るということは、それなりにゆとりのある家庭が多く、気の合った母親同志の集まりも出来た。紀和は一番若かったし、東京帰りの垢抜けた所が、グループの誰からも愛された。図らずも彼女の交際範囲は大きく広がった。

恒夫が高校を卒業し、九州大学の文学部に入学すると、また紀和の行動範囲が広がるかと思われた。一年の学期始めに博多に行き、下宿を決め生活用品を調達した。自分の買物もした。しかし恒夫は、それ以後の紀和の訪問を拒否した。

「男の子は難しいなあ。子離れは淋しいけれど、マザコンもなお困るし」

結局、紀和は引き下がった。母親同志のおしゃべりが口惜しさ、寂しさを紛らわせることになったのだった。

また十余年が過ぎた。

武男も既に無く、小此木家の姑も姉嫁も他界して、屋敷は無人のままとなった。紀和が手配して盆暮に手入れさせてはいるものの、その荒廃は始まっていた。

賢三もまた暫くは嘱託医で勤務していた。小此木家の墓掃除は欠かさなかったが、本家の現状を見るにつけ、賢三は、同級生の多くが上京した中で、恒夫を東京には出さなかったのは正解だったと思った。恒夫は日本古代史を専攻し、そのまま研究室に残った。彼は同じ研究室の後輩の圭子と結婚して、孫も二人いる。賢三は、いずれは恒夫に鹿児島大学に移ってほしいと思っていた。

先日までの残暑も嘘のように朝夕冷え込むようになったある日曜の夜、浩二から電話があった。浩二はこの春、定年後の嘱託も辞めていた。彼は八年前、浦和にマンションを買って、もう帰郷する気はないと言っていた。

「在京の中学時代の友人達と夫婦の帰郷ツアーを組んでね。僕等は鹿児島出身と言っても、桜島に修学旅行に行ったくらいのもんだろう。指宿や屋久島など巡るんだ。市比野に一泊するから一寸は会えるだろう。その時は連絡する」

賢三は浦和に「兄さんたちが旅行で来る」と言った。「たち」ということは絹江も来るのだと、もう五十歳を過ぎているというのに絹江は胸騒ぎを覚えた。

市比野に着くのは四時頃だから、タクシーで五時前にはそちらに行くと、前夜連絡があった。普段は絹江が会社まで賢三を迎えに行き、六時には帰宅しているが、五時に来るなら留守になる。賢三は、今日はタクシーで帰るから家に居てくれと言って車を降りた。

ところが賢三が診療所を出る寸前に、滅多にない急患が運び込まれた。工員の一人が、重い機材を足に落として指を潰してしまったのだ。応急の処置をして、対応できる外科病院まで運ばねばならない。患者に付き添い、処置に立ち会った。手続きなど書類処理も済ませて大急ぎで帰宅したが、すでに八時を回っていた。

「二時間ほど待ってもらったけど、在郷の人達も集まったの宴会が七時からあるそうで、七時にお帰りでした」

「宴会は浩二だけでいい筈だろう。なんでここに泊まれと言わなかったんだ」

疲れも苛立ちに叩かれてであろう、賢三の顔は見たこともないほどの怒りの形相になった。手近にあった有田焼きの灰皿を掴むと紀和の横の襖を目掛けて投げつけた。灰皿は襖の骨に遮られて落ち割れた。

紀和は息を飲んだ。怒りの対象は自分なのだ。

「私に絹江さんだけでも泊まるように言ってほしかったんだわ。でも何で私がそんなことを言えるだろう」

紀和は、絹江に対する賢三の恋慕の深さを思い知って、暗澹たる思いになるのだった。

その三年後、賢三は歯科診療所を辞めた。

家にいるようになると、賢三は実家から碁盤を持ち出し、碁の仲間を作って、何十年もの空白を埋めようとでもいうように熱中した。実力や勝負は別として、碁仲間での彼は、評判がよかった。何故か他人には愛想がよかった。紀和は一応お茶を出すものの、天候の挨拶ひとつしないうで引っ込んだ。賢三は、碁仲間が引き上げると、ニュースを聞きながら、ゆっくりと夕食をとり、魔去瓶を下げて自室でテレビを相手に、焼酎を二合ほど飲んで眠るのだった。

テレビはそれぞれの寝室に備えてあるが、茶の間には置いてなかった。昔ながらの新聞とラジオだけで、沈黙は長年の習慣であり、二人には不自然ではなくなっていた。

送迎の仕事がなくなり、賢三が自分の部屋を碁会所のように使い始めると、紀和はまた画の勉強を始めた。今度は、長年憧れていた油絵にした。賢三の昼食を用意した後、八号のキャンバスを対にして挟み、絵の具箱と車のトランクに積んで、鹿児島市内の小さな画塾に通った。

そんなある日、紀和は奥歯が痛みだした。以前から時々痛んだが痛み止めの薬でしのいでいた。ついに耐えられなくなったので駅前の藤山歯科に行った。昔、遠くから胸をときめかせた人の病院とは知っていたが、実際は始めて訪れた。

「おや、小此木先生の奥様ですね。お年を召しませんねえ」 彼が自分を覚えていたことに、紀和は満足した。眼鏡こそ掛けてはいたが、面影はあった。しかしそのソフトで腰の低い態度は、かつての紀和が抱いていた快活でリーダー的だった彼のイメージとは違っていた。

痛む歯の奥も虫歯になっていて、被せる必要があると言う。30分ごとの予約制で、十日ほど通った。次の患者が待っているのに、殆ど会話はなかった。最後の治療が終わった時、彼が言った。

「油を描いていると聞いてます。一枚くださいよ」

「まあ、また差し上げるような作品は描けなくて。そのうちイニシャル入りを飾ってくださいな。KOですから、ノックアウトしてしまうような物が描きたいですわ」

紀和はこやかに対応した。しかし歯科の扉を引くとき、胸のときめきを感じている自分を意識していた。定年後は老け込んで、所在なげな賢三に比べて、年下なこともあるが、現役で働いている藤山は、若々しく好ましく思えた。

自分の心の動きに臆病な紀和は、二度と奥山歯科の扉を開くことはなかった。

昭和が平成となり、賢三は七十歳を迎えた。年一回集まる中学時代の同級会で、七十歳の記念行事として東京から日光を巡る旅行が企画された。東京支部が細かい手筈を整えてくれて、夫婦同伴でどうぞという通知が来た。

「日光は行ったことがあるが、東京の友人にも会えるから参加する」

案内を見ながら賢三が言った。

「夫婦同伴でいいんだから、私も行きます」

賢三は黙っていたが、以前のように拒否はしなかった。黙って行かせれば、日光には行かないで埼玉に行くだろう。絹江には絶対会わせるものかと紀和は思った。大手を広げて立ちほだかっているような気分だった。

集団旅行だったが、二人で同じ旅をしたのはこれが初めてだった。友人たちの、寄り添うように仲よい夫婦の有りようが賢三には眩しかった。

ある日、賢三は庭石に腰を下ろし、真っ赤な夕焼けを眺めながらつぶやいた。

「一体、俺はこの家に何をしてきただろう」

紀和は「この家」ではなく「おまえに」と言いたかったのだと感じた。他人の夫婦と一緒に過ごして、初めて紀和との間の不自然さに気づき、振り返ってみたのだろう。

翌年、突然絹江の訃報が入った。浩二の電話では、乳癌が転移して最終的には大腸腎臓が冒されたのだという。

「発見が遅かったんで、急速に進んでしまった。賢三にも紀和さんにも死ぬまで知らせるなど言っていたんだ。お前のお金も昨日届いたよ。お金よりも毎月のお前の便りを楽しみにしていたんだ。いや長い間本当に有り難う」

紀和は賢三が絹江に小遣いと言って送金し続けていたのを知っていた。毎年、賀状に「忘れない気持ち嬉しい」という意味の絹江の添え書きがあったからである。

診療所を辞めて以来、賢三は自分のために金を使うことは殆どなかった。

紀和は、若い絹江の豊かな胸や白い肌、しなやかな四肢を思い浮かべていた。賢三の腕の中でどんな痴態を演じていたのだろうと思うと、頭に血が上った。この世に居なくなっても、やはり私は許せないと思った。

賢三は徐々に弱って行った。暮もいつしか止めて、自室で燗酎を飲みながらテレビを見ていることが多くなった。

ある夜半というより明け方に近い頃だった。紀和は賢三の部屋のテレビがジャージャー鳴っているのに気づいた。襖を開けると、パジャマ姿の賢三がうつ伏せに倒れていた。コップが転がっていて、中の燗酎は皿に吸い取られていて、匂いから部屋に立ち込めていた。

驚いた紀和が救急車を呼んだ。救急車の来るまでの時間がどんなに長く感じられたこ

とか。病院に着いてから医師の診察が始まるまでの時間を、髪が逆立つほど苛立って待った。賢三が身近にいることを鬱陶しいとさえ思い、愛したことはないと自分で信じていたに、この苛立ち、うろたえは何なのだろうと紀和は思った。今まで賢三を失うなどと考えたこともなかった。

賢三は市比野の病院に入院したが、脳梗塞で二度と意識は戻らなかった。

一年近く植物人間状態が続いた後、賢三は他界した。町長初め以前の会社の関係の人や親族が大勢参列した。紀和は長年張り詰めていた対抗意識のようなものが外れて、自分がすっかり腑抜けになってしまったように思った。

仏事は何とかこなしたものの、二ヵ月ほど寝込んだ。

潤んだ陽光が雑草の小さな花々を目覚めさせ、鶯の音が聞こえるようになった。紀和は気を取り直して、自分は何をやりたいのか気持ちの整理をつけて立ち上がらねばと思った。やはり油絵を描きたかった。そうだ、夫の八畳間をアトリエにしよう。

ある晴れた日、襖を取り払って、部屋を片づけることにした。洋服ダンスや整理ダンスは一応そのままにして、文机の上のテレビは居間に移した。文机を納戸に運ぼうと引出しを開けた。書類の上に写真の額があった。日光旅行の折、友人が二人を撮ったもので、紀和は初めて見るものだった。ホテルの玄関の前に寄り添って立っている、どう見ても仲のいい夫婦に写っていた。それは十年ほど前のものなのに、二人ともずっと若く見えて、随分昔のこのように思えた。

額に入れたということは飾りたい気持ちがあったのだろうに素直に表現出来ず、引出しに仕舞っていた賢三を、紀和は初めて可哀相に思った。あの旅行で、紀和は初めて、二人には呼び合う言葉がない、というより呼び合ったことがないことに気づいたのだった。みんなのように「あなた」などと声を掛けたことはなかったと・・・。

今、紀和は賢三の「何をしてくたさうか」という言葉を思い出した。そして「私は何をしてくたさうか」と初めて考えていた。そして冷やかだった二人の夜の生活を

思い起こした。自分はなんとかたくなかったことだろう。悪いのは賢三だ決めつけることしかしていなかった。

「私も本当はあなたの腕の中で悶えてみたかったのよ」

小さな声で、写真に告白すると、その写真を茶の間の壁に掛け、お茶目に投げキッスをした。

畳の上にビニールのカーペットを敷きつめ、二本のイーゼルを立てると何か画家のはしくれになった気分であった。三四年後には個展も開きたいという夢も湧いて来た。

子供時代、気難しかった母を敬遠していた恒夫は、福岡にある私立大学の教授になっていた。独りになった母を気づかって、時折、博多の海産物や、圭子の見立てたしゃれた小物など持って来てくれるようになっていた。孫たちもすでに独立していた。

紀和は今、ここに恒夫を見送って、夕焼け空を晴々と眺めている。昨夜は、多少誇張して話した部分もあったが、賢い圭子は、紀和の今までを理解してくれたことだろう。

時には、私の方が自分中心だったかもしれないと、反省して悔やむときもあるが、もうやり直しは効かない。

全てを吹き払って、また新たにキャンパスに向かおう。人生の波風は、人間として自分に成長と深みをもたらせてくれていることだろう。

それはきっと絵にも反映するに違いない。この残照の深い色合いのように。

「さあ頑張ろう」

紀和は静かに門扉を閉じた。